

# 聖書の学び／2012年

桑 栄 一

- 1月1日(神の母聖マリア) (カルケドン信条の本文を紹介) このカトリック教会の古典的信条は、キリストの神人両性を等しく強調する立場を守って、どちらか一方を強調して他方を退ける異端に対抗したのです。それは私たちがキリストの受肉の出来事を理解する場合の“原則”であって、すべてのキリスト者は決してこの原則に無知なままで、御子についても、神の母聖マリアについても語るべきではありません。
- 1月22日(年間第3主日) 原始教会における使徒たちは、キリストの福音によって人々を救いに導き、教会に集める漁師でありました。それは彼らが最初にイエスの弟子になったときから持っていた知識や能力によってではなく、主が死者の中から復活した後になって初めて理解した福音によってでありました。現代のキリスト者は、聖伝と聖書からキリストの福音を学ぶことを省略して、ただの善意や愛の精神で自分が“人間をとる漁師”になれると勘違いしてはなりません。従来多くの社会活動や救援事業が、“キリスト教精神で”とか“福音を实践する”などという美辞で飾られて来ました。しかし、それらに従事するキリスト教信者はほとんど全く、使徒たちから伝えられた福音については何も知っていなかったのです。原始教会で宣教した使徒たちは“決してそうではなかった!”という事実を前提にして、私たちはこのマコ1:17の意味を理解しましょう。
- 2月5日(年間第5主日) “多くの病んでいる人や苦しんでいる人たちが来ている、絶好の活動のチャンスなのに……”という弟子たちの意見と、“福音を宣教することが第一の目的である”というイエスの主張とが、見事に対比されています。それは初代教会における“宣教の使命”への理解を、明確に反映していると言って良いでしょう。現代の教会でも同様の意見の対立が繰り返されていて、教会派と社会派というような色分けが行われたりしますが、これはかなり根本的な問題であって、教会の福音理解の根幹に関わる事柄です。教皇ベネディクトは“「信仰年」開催の告示”の中で、“キリスト者はしばしば自らの社会活動が信仰を前提にしていると考えるが、実際にはこの前提は当然のものではなく、むしろしばしば公然と否定されている”と、鋭く指摘しました。そして世界中の司教に向かって、“主が与えてくださったこの霊的恵みの時に、信仰という尊い賜物を私と共に思い起こしてください”と呼びかけておられます。
- 2月12日(年間第6主日) 聖書は“罪と死の現実”と“キリストによる救いの確かさ”を、どちらも生々しく、そして力強く語っているのです。「つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。」(Ⅱコリ15:22) 私たちはこの世を覆う数々の悲惨や困難という現実を、未来のバラ色のベールという虚飾で包む必要はないのです。すべての人にやがて必ず訪れる病と老化と死を、それが恐ろしくないものでもあるかのように飾って、誤魔化す必要はないのです。「罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主イエス・キリストによる永遠の命なのです。」(ロマ6:23)
- 3月11日(四旬節第3主日) 私たちは、“聖なる、普遍の、使徒的、唯一の教会”がどこから産み出され(申32:18)、どこから掘り出されたか(イザ51:1)に目を注がなければなりません。教会は“キリストの死と復活”という起源に、そして“キリストの再臨と神の国”という目標によって基礎づけられているということを、私たちは明2確に思い起こさなければならないのです。
- 3月25日(四旬節第5主日) ……それが、「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ」(Ⅱコリ5:18)と宣べ伝えられている福音の内容であって、このような使徒たちの宣教こそが“ともにささげるミサ”を現代においても意味のあるものにします。人が救いを得るためには、ミサに出席することと並行し

て、使徒たちによる福音証言を自らしっかりと聖書から学ぶ必要があるということなのです。

- 4月8日(復活の主日) 我が国だけでなく世界中どこでも、ほとんどの葬儀は故人の死を美しく装い、家族や身近な人々の悲しみを和らげる働きをします。“故人は天国に行ったのだ、だから悲しまなくてよい、Happy, Happy”と慰めるのです。それは、人生における最大の“ウソ”でなくて何でしょう。……たとえ普段は忘れていても、すべての人は「死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にある」(ヘブ 2:15)のであって、死が怖くないとか、死が美しいものであるなどと言うのは全くの“ウソ”です。「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声を上げ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ」(ヘブ 5:7)と書かれている「御自分」とは、“私たち罪人に代わっての御自分”であったことを(1ペト 2:24)、そして「わたしたちの罪をすべて、主は彼に負わせられた」(イザ 53:6)という十字架と復活の出来事を、あなたはまだ信じていないのですか。洗礼の秘跡によって、私たちキリスト者はみな「キリストと共に死んだ」(コロ 3:3、ロマ 6:8)のです。今や私たちの(永遠の)命は、「キリストと共に神の内に隠されているのです。」
- 4月22日(復活節第3主日) 「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえ(ἱλασμός/名詞形)として、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」(1ヨハ 4:10) どうか「神の掟を守る」(v.3)「神の言葉を守る」(v.5)という表現を、神の怒りを宥める善行や功績のように考えないでいただきたい。私たちが主日ごとに集まって共にミサをささげるとき、“聖霊の交わりの中で、会衆と共にいてくださる復活のイエス”が、その成し遂げられた永遠の贖いを私たちに理解させてくださいますように。信者がミサ典礼をよく理解し、意識的に、敬虔に、また行動的にこれに参加するということが、聖書を通して神のこばに教えられるということ(聖書の学び)は、堅く結びついていて切り離せないのですから。
- 5月13日(復活節第6主日) キリスト教を現代人に分かりやすく説明する、あるいは自分が納得しようとして、それを“肉に属する考え方”(ロマ 8:5)、“人の知恵に教えられた言葉”(1コリ 2:13)に置き換えてしまう誤りを、私たちはしばしば犯して来ました。私の個人的意見では、カトリック教会の主日のミサの“公式祈願/試用”に、その危惧を大いに感じています。
- 5月27日(聖霊降臨の主日) プロテスタントの神学者であるカール・バルトは、1934年当時の彼の講演の中で、「教会においてこそ、神の真理は、…ただその秘義(秘跡)においてだけ、ただ信仰に対してだけ、己を我々に知らしめる永遠の主体である」と語りました。そうなのです。イエス・キリストの受難と復活を通して成し遂げられた神の偉大な業を私たちが聞き、理解し、信じる信仰は、ただ聖霊の助けによって与えられるのであり(カトリック教会のカテキズム 683)、洗礼の秘跡は、私たちが「水と霊によって…上から生まれる」(ヨハ 3:3-7/フランシスコ会訳)ために、教会に委ねられたキリスト御自身の御業なのです。
- 6月10日(キリストの聖体) ミサにおける“キリストのからだと血の奉献”に参加することが許されているのはキリスト者だけであること、そしてすべてのキリスト者は「洗礼の秘跡によって(これに参加する)権利と義務を持っている」(ミサ典礼書の総則 3)ということ、この祭日に特別に覚えようではありませんか。それは決して“たいして重要ではないただの宗教儀礼の一つ”ではなくて、「キリストにおいて世を聖とされる神の働きの頂点」であり、「また人々が、神の子キリストによって父にささげる礼拝の頂点」(総則 1)だからです。……私たちが感謝の祭儀の中の記念唱で、「信仰の神秘。」「主の死を思い、復活をたたえよう、主が来られるまで。」と唱和するとき(1コリ 11:26)、それは、「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです」(ロマ 4:25)と信仰宣言しているのです。
- 6月24日(洗礼者聖ヨハネの誕生) 「神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです。」(使 13:23) 洗礼者ヨハネを語ることは、この決定的なメシアの到来を語ることと決して切り離し得ないという新約聖書の証言は、今日の祭日を祝う私たちキリスト者の喜びの源です。

熱心に聖書を読んでいても、このヨハネとイエスの結びつきを正しく理解しないなら、「わたしを何者だと思っているのか。わたしは、あなたたちが期待しているような者ではない」(v.25)という叱責の言葉が、私たちの心を突き刺します。それは神の母聖マリアをはじめ、使徒と殉教者、すべての聖人への崇敬にも等しく当てはまることです。

7月15日(年間第15主日) すべてのカトリック信者は、洗礼、堅信、聖体の三つの秘跡(入信の秘跡／カトリック教会のカテキズム p.379 以下)を受けて、現在の信仰生活を歩み始めました。たとえそれがどんなに幼稚で初歩的な理解であったとしても、悔い改めて福音を信じるようになったこと、教会の信仰宣言を共に唱える会衆の一人となったことは、間違いありません。そして確かに「聖霊で証印を押されたのです。」(エフェ1:13) それで……、私たち一人一人はそれ以来おおいに成長して、“あらゆる言葉、あらゆる知識において、すべての点で豊かにされ、キリスト(の福音)についての証しがますます確かなものとなった”(Iコリ1:5-6)かと言うと、これは個人差がたいへん大きくて、一概にそうだとは言いきれないのが実情です。

7月29日(年間第17主日) “福音宣教誌8・9月合併号”が“日本の典礼刷新”を特集していて、その中で山本量太郎神父が思い出話を書いておられます。土屋吉正師から典礼憲章について教えられた初めの頃には、「典礼という儀式を中心に教会づくりを進めていくなんて時代錯誤」とさえ考えたとのこと。しかし、土屋師のもとで、典礼は教会の源泉かつ頂点であることを典礼憲章から学び、典礼は単なる儀式ではなく、教会が見えるかたちで現れる場であり、教会のいのちをその隅々にまで浸透させるために、典礼を深く生きることが大切だ、と繰り返し教えられました。」そして、“聖書と典礼”の編集長を務められたというのです。私たちの教会でも主日のミサのために無料で配布されている、せっかくの“聖書と典礼”から、今までこのような心意気を感じ取って来ただろうかと、反省してみましょう。

8月5日(年間第18主日) “十字架のいけにえが教会において絶えず現存するものとなる”(ミサ典礼書の総則48)ミサを信じるということが、私たち信者の共通の体験となることの大切さを、もっと理解しようではありませんか。「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです」(IIコリ5:17)という、生き生きとした体験こそが、ミサの命なのです。「神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく和解の言葉をゆだねられた」(同5:18)、「神と和解させていただきなさい」(同5:20)。この福音を聞くために、私たちは今朝もミサでキリストにお会いするのです。

8月19日(年間第20主日) 愚かな者とは、“時”を知らない人のことです。それは一般的な意味での時ではなくて、信仰によってだけ知ることの出来る“救済史の時”(ロマ13:11)、“終わりの時”(Iヨハ2:18)のことです。共にミサをささげている各地の教会に送られた励ましの手紙の中で、使徒ペトロは次のように述べました。「あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。」(Iペト1:5) そうなのです。私たちはミサの“ことばの典礼”と“感謝の典礼”によって、“神のことばの食卓”と“キリストの体と血の食卓”にあずかって、“神の栄光に与る希望を誇りにしている”(ロマ5:2)のです。その訪れの“時”を知らなかった愚かなおとめのようにってはなりません(マタ25:1-13)。

9月2日(年間第22主日) カトリック教会が“御言葉”あるいは“神のことば”と言うとき、それはキリストの福音のことであって、神はこれを“聖伝と聖書”によって教会に託されました(神の啓示に関する教義憲章10)。この“神のことば”を正しく保持し、忠実に教えることは、特に教導職にとって際立って大切な務めの一つです。ミサにおける“公式な説教(ホミリア)”が司祭または助祭に保留されているのは、このような際立って大切な務めを強調するためであって、恵みを受けた信徒が“教話(プレディカチオ)”によって“神のことば”を人々に伝えることまでもが、禁じられている訳ではありません(カトリック新教会法典766-767)。

9月16日(年間第24主日) 「ペトロが答えた。“あなたは、メシアです。”」この信仰宣言が、教会がその上

に建っている岩であり、十二使徒の筆頭者であるペトロの口に帰されているのは、原始教会の宣教の特性を示しているのであって、現代の私たちはこの特性を、“教会に委ねられた信仰の遺産”として理解することが大切です。……キリスト教信仰は本来、個人の主体的信仰であると同時に“教会の信仰”であって、この両面が常に健全な均衡を保っている必要があるのです。

10月14日(年間第28主日) カトリックでもプロテスタントでも、一般的な傾向として、“福音と信仰”のことは教導職に委せて、信者はいわば理解抜きで“教え”を守る努力をしていけばよいという考えが、教会の大勢であるように見えます。しかも実際には、その司祭たちも牧師たちも、そのような教会の信者の中から産み出されたのです。ですから、彼らがミサや礼拝の説教で“教え”は語っても、“福音と信仰”を主題にすることはほとんどないという現実を、私たちは直視する必要があります。当然といえば当然なのですが、現代の教導職と一般信者は、能力の点でも知識の点でも同じレベルのところにおいて……、「主が与えてくださったこの霊的恵みの時に、信仰という貴い賜物をわたしとともに思い起こしてください」という教皇の呼びかけの下に立っているのです。「信仰年」を、私たち一人一人が「変わることはない信仰をもっとよく知り、将来の世代に伝える必要を、強く感じるため」(自発教令)に、悔い改めて立ち戻る(黙2:4-5)機会としなければなりません。

10月21日(年間第29主日) 信仰年に入り、この機会にカトリック浜松教会の主日のミサの信仰宣言で、ニケア・コンスタンチノーブル信条が唱和されることになったことを、大いに喜び、神に感謝をささげたいと思います。キリストの人格についての教理と三位一体の教理に関して、最終的なカトリックの立場を表明するに至ったニケア公会議(325年)、コンスタンチノーブル公会議(381年)、エフェソ公会議(431年)、カルケドン公会議(451年)の成果であり、いわばカトリック信仰の骨格であるこの信条を、現代の私たちの教会は必要としているからです。

11月11日(年間第32主日) ミサは、人間の“こゝとぼとじるじ”を通してキリスト御自身が働かれる“キリストの行為 - 神の民の行為”であって(ミサ典礼書の総則1)、死者の復活と来世のいのちを待ち望む“神の国を受け継ぐ民”を育てます。ですから地上の教会は、それ自身が目的ではなくて、王であるキリストの到来を待ち望み、来るべき神の国の希望に生きているのだということを、決して忘れてはなりません。……キリストこそが諸民族の光であって、教会はその道具に過ぎません(教会憲章1)。教会自身の活動とキリストの御業とを混同したり、教会を単なるこの世の活動団体の一つと考える時、そこにあるのは病める“見せかけの”教会でしかありません。

11月18日(年間第33主日) もし私たちが新約聖書、特に福音書を真面目に読むなら、私たちがそこで聞くのは原始教会の説教であって、キリストの再臨と御国の完成の約束こそがその目標である(フィリ3:13-14,20-21)ということを知るのであります。信仰年は、カトリック教会のすべての人々に、「カトリック教会のカテキズム」を通して“教会の信仰”を学ぶことを期待していますが、その“信仰”の目標がキリストの再臨と御国の完成であることに注目しましょう。……“教会の信仰”のこのような終末的性格を、信仰年を通して一人でも多くのカトリックの子らが学ぶことが出来ますように。

12月23日(待降節第4主日) エリサベトと胎内のヨハネも祝福されていましたが、マリアの受けた祝福はさらに勝っていました。その祝福は神からのものであって、人の誇り(ロマ3:27)とは無縁なものであったことに注目しましょう。…… 今年の6月に、現在の“アヴェ・マリアの祈り”が公式に使われるようになるまではかなり長期に亘って、“聖母マリアへの祈り”が唱えられていました。より古い“天使祝詞”からかなり大胆に訳し変えられた「主はあなたを……祝福されました」という表現に、特に老年の信者たちから非難が集中していたことが思い出されます。なんと愚かで無知な抗議であったことかと、嘆かないではられません。